

岡崎城(龍城, 龍燈山城)(市史)(岡崎市康生町)

岡崎城(おかざきじょう)は、愛知県岡崎市康生町にあった城。徳川家康の生地である。別名、龍城。戦国時代から安土桃山時代には徳川氏の持ち城、江戸時代には岡崎藩の藩庁であった。

菅生川と矢作川の合流地点にある龍頭山という丘陵を利用して造られている。元は、龍頭山の砦として三河国仁木氏の守護代であった西郷稠頼(つぎより、つぐより、又は、ちかより)、そして、その子頼嗣(よりつぐ)が北方に対する防御として築城したものである。当時は、龍燈山城(りゅうとうざんじょう)と呼んだ。それを、松平清康が西郷信貞(松平昌安)から奪い取り改修拡張整備したものが岡崎城である。

龍頭山はもともと小高い丘で、山頂に本丸が置かれた平山城として築かれていたが、本多康重から3代忠利(1600年(慶長5年) - 1645年(正保2年))にわたる改修によって平城となっている。この際、本丸に複合連結式望楼型3重3階の天守(1617年(元和3年))が建てられた。

本丸の北方に持仏堂曲輪、その北方下に二の丸、その北方に北曲輪、二の丸の東側には三ノ丸と東曲輪、その東に備前曲輪と大手門があった浄瑠璃曲輪、本丸と二の丸の西方下に坂谷曲輪、その西に白山曲輪と搦手口に当たる稗田門があった稗田曲輪、本丸の南は、菅生川沿いに菅生曲輪があり、それに、本丸から北側へ6重、西側へ4重の外堀を廻らせていた。

存城当時の東海地方の城では3番目に数えられる規模であったが、1873年(明治6年)の廃城令によって廃城となり城内の天守以下の建物及び土地を払い下げ、現在は一切の建物を失い、本丸と周辺の持仏堂曲輪、隠居曲輪、風呂谷等の曲輪と石垣、堀などの遺構を残すのみで、敷地は龍城神社、岡崎公園として整備され、天守などが復興され、市民の憩いの場になっている。

東隅櫓が2010年(平成22年)3月に再建された。望楼式二重櫓と呼ばれる木造2階建て、入り母屋造りの屋根は、岡崎藩主を務めた本多氏の家紋立ち葵が刻まれた本瓦葺き。壁は白漆喰塗り。高さ約9.4メートルで、かつて東曲輪だった岡崎公園駐車場の南東角に位置する。1781年(天明元年)の「岡崎城絵図」を基本資料としているが、東隅櫓の図面は現存しなかったため、愛媛県松山市に現存する同時代の松山城の野原櫓などの形式を参考にして、江戸時代の工法を忠実に再現し建設した。城内で発掘された石材を使い、空積み石垣も築いた。隣接して同時に整備した長さ約45メートルの城壁と合わせ、総工費は約1億円。年中無休で内部を公開している。

東条城跡(古城公園)(特無)(西尾市吉良町駁馬字城山)

吉良荘の東半分を治めた東条吉良氏の居城跡

鎌倉時代前期の承久3年(1221)に起こった承久の乱の後、足利義氏が三河国の守護になり、吉良荘の地頭職を兼務しました。

足利義氏は吉良荘を貫く当時の矢作川を境に、西側を吉良荘西条として現在の西尾城の位置に西条城を、東側の吉良荘東条に東条城を構え、長男長氏(ながうじ・おさうじ)を西条、三男(あるいは四男)義継(よしつぐ)を東条に置き、吉良荘を分けて治めました。

東条城は東条吉良氏の居城跡で、曲輪や一部土塁が残り、中世の城の様子をよくとどめています。平成4年に城門・物見櫓(やぐら)などが復元され、往時をしのぶことができるようになりました。周囲には桜が植えられ、古城公園として春には桜を楽しみに多くの人が訪れます。

築城年代は不明。一説によると、承久3年(1221年)に、足利義氏が築き、三男吉良義継を入れる。以後、義継を祖とする前期東条吉良氏と吉良尊義を祖とする後期東条吉良氏の居城となった。

城主の吉良氏は、戦国時代の義昭の時に永禄4年・同6年(1563年)と松平氏の攻撃に相次いで敗れ

て退城、以後は東条松平家の居城となる。天正 9 年（1581 年）城主松平家忠（甚太郎）が無嗣で病没し、家康の四男・松平忠吉が家忠養子となるが東条城には入らず、翌天正 10 年（1582 年）には忠吉が駿河国沼津城主となり東条城は廃城となった。

寺部城址(特無)(市史)(西尾市寺部町堂前)

戦国時代にこの地域を支配していた幡豆小笠原氏の居城

寺部城（てらべじょう）は戦国時代にこの地域を支配していた幡豆小笠原氏の居城です。創建年代や築城者は不明ですが、永正 11 年（1514）小笠原定政がそれまで寺部城に拠っていた早川三郎を倒し、寺部城主となったとされます。

天正 18 年(1590)の徳川家康の関東移封に従って小笠原氏も上総国に移ったため、廃城となりました。三河湾を見下ろす標高 30m の丘陵上に築かれた連郭式平山城で、曲輪、土塁、堀などの遺構がよく残っています。

西尾城(鶴城, 鶴ヶ城, 錦丘城, 西条城)(市史)(西尾市錦城町)

西尾城(にしおじょう)は、三河国幡豆郡西尾（現在の愛知県西尾市錦城町）にあった城。別名は、「鶴城」、「鶴ヶ城」、「錦丘城」など。また、「西条城」が旧称とされるが、その改名時期については諸説がある。

創建当時、中世期の規模については不明である。1585 年（天正 13 年）に酒井重忠によって、東の丸と帯曲輪の拡張と堀や石塁の造成、櫓門、櫓類、天守などが増築された。1590 年（天正 18 年）田中吉政によって、三の丸の拡張や大手黒門、新門の楼門 2 棟、櫓門 2 棟が建てられている。このとき東の丸にあった大手門は、太鼓門と改称されている。

1657 年当時の城郭構造は梯郭式の平山城で、西南部から本丸、二の丸、姫の丸、北の丸、東の丸、三ノ丸、それを取り囲む惣構えが構えられていた。本丸には 3 重櫓と 3 棟の 2 重櫓、二の丸には 1 棟の 2 重櫓、南東隅に複合式望楼型 3 重の天守が建てられ、北の丸、東の丸、三の丸にそれぞれ 2 棟の 2 重櫓が建てられていた。

天守は元々、本丸の北東隅に建てられていたと考えられており、1585 年の改築のときか正保 2 年頃までにで天守を本丸から移したといわれている。正親による初代天守については、1585 年に二の丸天守が建てられた後も本丸隅櫓として残されていたとしている

伊奈城(上嶋城)(市史)(豊川市伊奈町柳 38 番地)

伊奈城は 15 世紀の中頃に本多定忠・定助によって築城され、上嶋(あげしま)城ともいわれていました。16 世紀初めには牧野一門が城主となっていたことが知られていますが、天正 18 (1590) 年 8 代城主本多康俊が、下総国（千葉県）小篠へ移封されるまで約 150 年間、伊奈本多氏の居城でした。伊奈城主の菩提寺東漸寺に伝わる古図によると、三方を河川と沼地に囲まれた要塞堅固な地に加えて、城下まで船便の良い地であったようです。永禄年間に大塚城主の岩瀬氏に攻められましたが、当時の 6 代城主本多忠俊は城を固く守り、同時に兵を御馬・梅藪に出して戦い、これを退けました。伊奈城の攻防で記録にみえるのはこの一戦だけです。下総國小篠へ移封後は廃城となり、それ以来 400 年余りを経た現在も土塁の一部と本丸の郭跡が残っています。特に土塁は室町時代の地方の平城を今に伝える貴重な遺構といえます。